

吉祥天女

2007(平成19)年7月6日鑑賞(テアトル梅田)

★★★



監督・脚本＝及川中／出演＝鈴木杏／本仮屋ユイカ／勝地涼／市川実日子／深水元基／津田寛治／江波杏子／小倉一郎／青山知可子／嶋田久作／国分佐智子／三谷昇 (CK エンタテインメント配給／2007年日本映画／116分)

……純日本的な金沢の若きファム・ファタール＝吉祥天女に鈴木杏を指名！それがこの映画最大のポイントだが、その賛否は……？ 旧名家のお嬢サマと新興企業創業家の不良息子との政略結婚の企みは、思わぬ方向性を生み、悲劇的な結末を……。『犬神家の一族』(06年)を彷彿させる雰囲気だが、「女の武器」の多用はちょっと……？ しかして、ラストの説得力のほどは……？

原作は……？ 吉祥天女とは……？

私は全然知らなかったが、吉田秋生が描く少女コミック『吉祥天女』は1984年に第29回小学館漫画賞を受賞し、約250万部の売り上げを記録している大ヒット作とのこと。タイトルからしていかにも難しそうなイメージだが、この原作は主人公「小夜子」の強烈なキャラクターが売り。そして、小夜子が放つ強烈な魅力から熱狂的なファンが多く、少女コミックの枠を超え、男女を問わず幅広い層から支持されているとのこと。

パンフレットによれば、「吉祥天女」とは、インドの女神マハーシュリーを起源としており、富と豊穡、そして家庭平和の神と言われ、容姿の美しいことでも知られる女神、とのこと。そんな「吉祥天女」そのもののような若い女性が主人公として登場する物語だから、彼女が複雑でシリアスなキャラクターの女性であることは容易に想像がつくもの。しかし、その女性は、慈悲の心溢れた神や仏のような存在……？ それとも悪魔のような存在……？ それが興味の的。

サスペンスタッチの映画にするのなら、主人公小夜子は当然魔性の女となるはずだ

が……？

吉祥天女＝小夜子は誰が……？

パンフレットには、妖艶な美貌と雰囲気をも併せ持つ少女“小夜子”について、次のように紹介されている。すなわち、「心のうちを見透かすような大きな瞳、長くツヤのある黒髪——。男も女も惑わせる完璧な美貌と、17歳とは思えぬ妖艶な雰囲気を持つ、ミステリアスな少女・叶小夜子。理由あって実家を離れて育ち、12年ぶりに叶家に戻った彼女は、出会う者すべての心を奪い、虜にしていく。小悪魔のように囁いたかと思えば、慈愛に満ちた母親のような微笑みをたたえ、また鬼のような目つきで睨みをきかせたかと思えば、天女のような優しさで相手を包み込む……。自在に変化するその表情に、女は憧れ、男は翻弄されていく」

小夜子がこんな女性だとすると、この映画の成否のポイントは、吉祥天女＝叶小夜子役を誰が演ずるかにあることは明らか。その条件は、①神秘性とカリスマ性、②神や仏のようなやさしさと慈悲深さ、③男はもちろん、女も惹きつける不思議な魅力、④高貴さと美しさなどだが、さて、そんな条件を満たす若手女優は誰……？

2002年に吉田秋生原作の『ラヴァーズ・キス』を映画化した経験をもつ及川中監督は、映画用の脚本を書き進めていく中で、大幅に小夜子のキャラを原作から変えたいらしい。そしてパンフレットによると、「どこか抽象的で、ミステリアスで妖艶な雰囲気を持つ女子高生。見た目がコミックのキャラに似ていることよりも何より演技力が必要で、この複雑で巧妙な小夜子という難役を演じられるのは鈴木杏しかいないと、監督の及川は考えていた」とのこと。さて、この鈴木杏とはどんな女優……？

坂和流、「鈴木杏」論は……？

私は鈴木杏が出演した『ジュブナイル』（01年）、『青の炎』（03年）、『頭文字（イニシャル）D』（05年）は観ていないが、過去『ヒマラヤ杉に降る雪』（00年）、『花とアリス』（04年）、『監督・ばんざい！』（07年）で3度鈴木杏を観ているが、残念ながらあまり強烈な印象は残っていない。『ヒマラヤ杉に降る雪』では工藤夕貴が目立っていたし、『花とアリス』でも、花役の鈴木杏よりもアリス役の蒼井優の方に私の目はいっていた。また『監督・ばんざい！』における、岸本加代子との母娘役での演技はあまりにもバカバカしすぎて問題外だった。

このように、なぜ私の印象に強く残らなかったのかをよく考えてみると、それは多分、彼女の日本風で大顔な顔立ちを、あまり美人と思えないせい……？ 考えてみれば、『花とアリス』では、花とアリスのキャラは大きく異なっているけど、登場するシーンの数はほぼ同じだから、同じように印象に残ってなければおかしいのだが、私には美しいバレエのシーンをはじめとして蒼井優の美しさだけがしっかりと記憶に刻まれることに。

『吉祥天女』でも、主人公はもちろん叶小夜子なのだが、その親友の麻井由似子を演ずる本仮屋ユイカの方がどう見てもかわいく、印象に残ってしまう。もっとも、彼女は『スウィングガールズ』（04年）、『Dear Friends ディア フレンズ』（07年）で既に私が注目していた美人女優。さらに、卒論のテーマを叶家の財宝研究と定め、叶家の歴史と家宝について調べていくうち、驚愕の事実にとどりに着いていく由似子の姉麻井鷹子を演ずる市川実日子も、『いま、会いにゆきます』（04年）、『嫌われ松子の一生』（06年）、『ユメ十夜』（06年）で、私が注目している美人女優。

小夜子の義姉にあたる叶浮子を演ずる国分佐智子を含めて、そんな美人女優が揃い踏みしている中、小夜子を演ずる鈴木杏だけが、存在感と演技力はバッチリで主役としての役割は十分果たしているものの、あまり美人と思えないのが少し不満……？

もっとも、以上はあくまで私の主観的な好みすぎないが……。

金沢という舞台はピッタリ

この映画の大テーマは、そのタイトルどおり「吉祥天女」。そして、ミステリアスな物語のキーワードは、12年前の火事で消失したとされる叶家に代々伝わる「天女の羽衣」で、「天女の羽衣」に触れた女は幸せになるが、それに触れた男には祟りがある」という伝説がミステリアスな物語を……。さらに、この映画ががぜんサスペンス色を帯びるのは、小夜子が5歳の時の天衣神社の火災で小夜子の義理の兄である叶泰之が謎の死を遂げたこと。これは単純な火災による事故……？ それとも、この直後に小夜子が叶家を去っていったことと何か関係があるの……？

この映画は、5歳まで住んでいたという金沢にある春日高校に小夜子が転校してきたところからスタートするが、こんなミステリアスかつサスペンス色豊かな展開の物語に、金沢という舞台はピッタリ。

パンフレットによれば、広大な日本庭園を有する旧名家叶家の邸宅は、県の重要文

化財に指定されている金沢屈指の名家・辻邸や蔵六園を使用したとのこと。ちなみに辻邸の使用については、撮影は許可されたものの、わずかな傷もつけないようスタッフ・キャストに緊張感が張りつめていたとのこと。その他、春日高校は石川県立工業高校を使用、能楽『羽衣』を舞うシーンは、金沢の奥座敷の深谷温泉の石屋旅館を使用するなど、古都金沢の雰囲気がいっぱい。さらに、金沢には兼六園、近代美術館、犀川そして東茶屋街など、私も数回訪れた名所がいっぱいあるが、この映画ではそれらがうまく活用されているから、パンフレットと十分見比べてみるのが不可欠……。

昭和45年という時代設定は……？

他方、この映画の物語の骨格は、旧名家の叶家と新興企業の遠野建設との政略結婚。政略結婚の目的は、遠野家の総帥遠野一郎（嶋田久作）が春日高校の中等部を建設するための用地を確保するため。すなわち、借金まみれであるにもかかわらず、所有する広大な土地の買収に応じない叶家を籠絡させるためだ。

この映画は、そんな物語の時代を昭和45（1970）年と設定した。昭和45年といえば、1972年に成立する田中角栄内閣に向けて彼の「日本列島改造論」が吹き荒れ、1968～1970年の間に都市計画法・建築基準法・都市再開発法による「近代都市法」が成立した時代。そして、その20年後の1989～1990年の土地バブルの絶頂と崩壊に向かって、良くも悪くも土建国家ニッポンの特徴を最もよく発揮した時代。したがって、土地買収をめぐる政略結婚という物語には、そんな昭和45年という時代がピッタリかもしれない……。

しかし残念ながら、この映画ではその時代の香りが全く感じられないと思ったのは私だけ……？ ちなみに、横溝正史原作の『犬神家の一族』は再三映画化されたが、これは戦後すぐの昭和22年という時代で、いずれの映画でもその時代の香りがプンプン薫っていたもの……？ そう考えると、あえてこの映画の時代設定を昭和45（1970）年と、今から37年も前にする必然性はなかったのでは……？

高校3年生時点での、男女の力関係は……？

男よりも女の方が肉体的・精神的に大人になる時期が早い。したがって、小6～中2くらいまでは身長・体重はほぼ同等だが、心の成熟度は女の方が上。しかし、中2～高3くらいになると男は急に大人になるから、身長・体重が増え、精神的にも大人

になっていくもの。したがって、小夜子が転校してきた高校3年生の春であれば、男も女もほぼ同等の成熟度というのが普通だが、この映画における小夜子を見てみると、その成熟度において、彼女だけは特別な感じ……。

小夜子の隣の席になり、「よろしくね、麻井さん」と声をかけられた麻井由似子（本仮屋ユイカ）をはじめ同級生の女の子たちは、たちまち小夜子の虜になってしまった。他方、小夜子の政略結婚のお相手とされている遠野家の息子暁（深水元基）も、タバコばかり吸って悪ぶってはいるものの、小夜子をモノにできると考えると内心うれしそう……？

また、7年前に両親を亡くし、病身の妹水絵と共に遠野家の養子となっている涼（勝地涼）は、そんな暁と小夜子の様子をじっと遠目に見ているだけで無口だが、何か思うところを秘めている雰囲気。魔性の女小夜子は、露骨に暁ではなく涼の方にやさしい眼差しと微笑みを向け、暁に対して「私はあなたとは結婚などしませんよ」と答えているから、この三角関係はややこしくなっていきそうな予感が……？

こんな3人の絡み方を見てみると、3人も高校3年生であるにもかかわらず、圧倒的に小夜子がリードしており、男2人はそれに振り回されている感じが……。

見事なアクションシーンだが……？

友達になった由似子たちと小夜子が一緒に天衣神社に上った時、周りを取り囲んだのが叶家のお姫サマに興味津々のたくさんの不良たち。彼らが何を目的としていたのかは明らか……？

もっとも、現在のように凶悪な少年犯罪が蔓延している時代ならこんな行動も当然かもしれないが、1970年という時代の、金沢という地方都市の高校3年生にこんなたくさんの不良がいたの……？

それはともかく、ここでビックリさせられるのは、小夜子は良家のお嬢サマでありながら女格闘家としても一流だったこと。鈴木杏自身が「アクションシーンはすごく楽しかった！ これまでは殴られたりする役ばかりだったので、すごく爽快でした。これからも、アクションはどんどんやりたいです！」と語っているように、そのお手並みは鮮やかなの一言。そしてこれによって、さらに小夜子は由似子たちの畏敬の念を高めることになるのだが、現実問題としてこれはあまりにもやりすぎで、マンガチックになりすぎたのでは……？

さて、このアクションシーンについてのあなたの賛否は……？

昔、会ったことがあるの……？

小夜子が転校してきた日、「よろしくね、麻井さん」と由似子に声をかけたことに、この映画の重大な秘密を解くカギがすべて隠されている。そう言われると、由似子自身も小さい時、どこかで小夜子と会ったことがありそうだと思うものの、容易にそれを思い出すことはできなかった。

12年前、天衣神社の火災で死亡した泰之の妻が、遠野家から叶家に嫁いできた遠野一郎の妹の浮子（国分佐智子）。叶家に嫁いだ浮子は、今小夜子の祖母叶あき（江波杏子）の介護をしながら策略をめぐらし、遠野暁と政略結婚させるため、小夜子を実家に呼び戻したというわけだ。

他方、叶家の蔵の管理人三木（三谷昇）の協力を得て、叶家の歴史と家宝を調べていた麻井鷹子（市川実日子）は、「叶家は天女の末裔だ」という天女伝説を聞かされるとともに、独自の調査によって次第に12年前の「あの事件」の真相に迫っていくことに……。すると、何と小夜子はその事件の真相をすべて知っているかのように、鷹子に対してある「告白」を……。もっとも、それはすぐに「冗談よ」と打ち消されたが、さて12年前、小夜子と由似子はどこかで出会ったことがあるのだろうか……。そして、小夜子の特徴のある目を見て、これはあの時のあの目だ、と由似子が思い出したとき、既に叶家と遠野家の男たちには、数々の悲劇が……。

女の武器はいつもこれ……？

自分の魅力を自覚している女は、男を陥れようとする時はいつもその魅力で男を誘い込むもの。そして、そんなテクニックは、小夜子レベルになるといつでも自由に使いこなせるもの……？

最初にその犠牲となったのは、不良たちから襲われたことを公表しないでくれと小夜子に懇願した担当教師の根津。彼は新たに建設される春日高校中等部の教頭に内定しているため、スキャンダルを表沙汰にたくないという理由で、そんな身勝手な申し入れをしたわけだが、そんな根津に対して小夜子は一体どんな狂言芝居を……？

ここで示されたような狂言芝居をシャーシャーとやってのけることができる女と密室で2人だけにいると、男はヤバイこと明らかなだが、現実問題としてはなかなかそれ

を避けることができないもの……？ そんな小夜子の女の魅力を武器にした策略によって、何とある日、遠野家の総帥一郎までも大変なことに……。

これぞ、金沢の若きファミ・ファタール……？

ある日、小夜子を心の底から愛してくれていた祖母あきの容態が急変し、それを契機として小夜子は暁との結婚を了解することに。しかし、突然あきの容態が悪化したのはなぜ……？ そんな疑惑をもった小夜子は、浮子に対して、さらに浮子の謀略の片棒を担いでいた小夜子の父和憲（小倉一郎）に対して、ある行動を……？

こんな小夜子の行動を見ていると、「これぞ、古都金沢を舞台とした、若き17歳のファミ・ファタール」と、思わず背筋が寒くなったのは私だけ……？

身分関係図を頭に入れておいた方がベター……？

『犬神家の一族』は、犬神左兵衛の遺産相続をめぐる、文字どおり犬神家一族の争いを描いたものだが、それを理解するためには犬神家の家系図と相続に関係する人物たちの関係を、あらかじめ一覧表にして整理しておいた方がベター。なぜなら、そうしておくとならば金田一耕助探偵が語る推理がよく理解できるはずだから……。

この『吉祥天女』も、叶家と遠野家の政略結婚をめぐる登場人物の数は多いうえ、結構複雑なストーリーだから、『犬神家の一族』と同じ意味で身分関係を一覧表にして、頭に入れておいた方がベター。ちなみにパンフレットには「吉祥天女 人物相関図」があり、叶家と遠野家に分けてうまくその関係が解説されているから、是非それを活用したいもの。

せっかく面白い映画を観ても、消化不良のままではもったいないから……。

普通の少女の顔は見たくない……？

映画全編を通じて気品に満ちた天女顔を続けていた小夜子だったが、涼の死亡を目のあたりにすると、突然泣きじゃくる姿を見せることに……。すると何と、それは普通の女の子の顔……？ これは、ちょっとマズいのでは……？

私としては、小夜子はあくまで吉祥天女としての威厳を徹底してほしかった、つまり小夜子の普通の女の子の顔は見たくなかったのだが……？

結局、生き残るのは……？

『犬神家の一族』でも、相続人となるべき男たちは次々と死んでいったが、この映画でも小夜子が12年ぶりに実家に戻った後、担任教師の根津がある日奇妙なところで死体となって発見されたのをはじめとして、次々と犠牲者が……。『犬神家の一族』の犠牲者は男だけだったが、『吉祥天女』では祖母のあきや義理の姉の浮子も、さらに小夜子の父和憲も犠牲者に……。

すると、暁の父の一郎は……？ また、暁や涼は……？ その複雑なストーリーと結末はあなた自身の目で確かめてもらいたいが、結局最後まで生き残るのは小夜子だけ……？ そんな結末が予想されるのは当然かも……？ もしそうであればそれでもいいのだが、そうなるについては、その必然性がなければ説得力がないはず。さて、この映画におけるその説得力のほどは……？

2007(平成19)年7月12日記

ミニコラム

近江町市場にも再開発の波が

金沢旅行は兼六園、金沢城等の見学だけではなく、加賀百万石の美意識を盛り込んだ加賀料理も楽しみ。また金沢駅から徒歩15分の近江町市場も市民の台所として有名。ここには生鮮食品がいっぱいで、高級料亭に行かなくても新鮮な海の幸をタププリ味わうことができる。06年2月10日～11日の金沢地裁への出張の際、私はここで名物の海鮮丼をたらふく食べて大満足。また

約170軒の店をのぞきこみながら歩き、おみやげのカニの物色とその値段交渉をするのは楽しいもの。

しかし、この市場も老朽化を理由に地下1階地上5階の再開発ビルが建設され08年11月開業とのこと。時代の波には逆らえないが、あの時の風情がなくなると思うと実に残念。

2007(平成19)年11月22日